



繋がる歴史と託す未来。

世界遺産への登録は、地元住民の理解と新たな価値観の創造であり、活用して保全することで、歴史は歩み続ける。



道普請ウォークの様子。企業のCSRや社員研修、学校教育の一環としても人気が高く、平成21年度より通算で17000人以上が参加。

を異にする3霊場と、さらにそれらを結ぶ道があり、利用し合いながら生まれた風景は、世界に比類なき資産として評価された。

有形資産に伝説や伝承が結びつき長い時間をかけて築いてきた風景を文化的景観という。つまり、形ないものが大切な資産であり付加価値となるのだが、見慣れた風景の中で暮らす住人がその価値を見いだすことは難解なこととなる。「世界遺産についての認知度も低いなかで、古道の地権者に対する説明ですら大変でした」と当時の県世界遺産登録推進室長の辻林氏(現世界遺産センター長)は、苦労を振り返る。単に文化財を守るだけでなく、周辺の生活や風習、神秘的な空気感を

住民生活も大切な文化遺産

本州最南端、太平洋に大きく張り出す紀伊半島。豊かな降水量が深い森と複雑な地形を育み、滝や巨木に神が宿るといった自然信仰が息づいた。神々が籠もる特別な地域といわれ、日本人の精神文化の原郷と呼ばれるこの地が、「紀伊山地の霊場と参詣道」として世界遺産に登録され9年が過ぎた。

同一の山岳地域のなかに、起源

を異にする3霊場と、さらにそれらを結ぶ道があり、利用し合いながら生まれた風景は、世界に比類なき資産として評価された。

有形資産に伝説や伝承が結びつき長い時間をかけて築いてきた風景を文化的景観という。つまり、形ないものが大切な資産であり付加価値となるのだが、見慣れた風景の中で暮らす住人がその価値を見いだすことは難解なこととなる。「世界遺産についての認知度も低いなかで、古道の地権者に対する説明ですら大変でした」と当時の県世界遺産登録推進室長の辻林氏(現世界遺産センター長)は、苦労を振り返る。単に文化財を守るだけでなく、周辺の生活や風習、神秘的な空気感を



守り伝える。広大なエリアだけに、その難しさは今も変わらない。

古道を歩くことは未来へのメッセージ

登録後、観光客が急増し、周辺のゴミや古道の傷みが課題となった。「ゴミはマナーの徹底で少なくなっていくが、土の路面への負荷は防ぎようがない。そこに大雨が降れば土が流され、でこぼこになる。熊野古道は老若男女、信不信を問わず、誰をも受け入れてきた寛容の地。歩行者を制限するようでは、文化の本質を見失ってしまう。活用しながら保全することが大切だし、やはり古道は歩いてもらうのが一番なんです。」と当時世界遺産センターに出向していた速水氏(現新宮市立緑丘中学校長)は語る。その解決の一助になればと試みたのが、古道の維持補修



を行うボランティアを組み合わせたと「道普請ウォーク」である。生活者も来訪者も分け隔てなく歴史の伝承者になれる参加型の保全活動は、人類共通の宝物を未来に紡ぐひとつの答えとなった。

世界遺産の巡礼道は、過去と未来、人と人をも繋いでいる。



「登録されてほっとしたというより、今後どんな風に情報を発信していけばいいのかと身の引き締まる思いでした」と話す辻林浩センター長。世界遺産センターは情報発信の場であるのと同時に、地域住民との交流、情報交換の大切な場所である。